双葉通信【第５回】　160601

上　田　　勉

今回は、稲作農業と減反についてです。

営農再開の歩み　楢葉町・上繁岡水田復興会

「昨年９月に避難指示が解除された楢葉町では、本年度から本格的に米の作付けが始まり、14 の個人・団体が営農を再開した。約 20ha の水田で作付が行われるが、東京電力福島第一原発事故前は、約 410 ha で、主食用米が栽培されていた。

町北部の上繁岡で、営農再開に取り組む団体がある。上繁岡水田復興会だ。

同復興会は、牛の繁殖仲間と作っていた上繁岡和牛研究会が母体、2013 年に、６人の仲間で結成した。農地は放置すると荒れてしまう。先祖代々受け継いできた農地を守るためにも、水田を再開させようという中間たちが集まった。

「１人じゃやらなかった。やっぺという人がいて、やる気になった。１人だったら、今頃パチンコばっかりしてたかも知んねえな」その言葉に、中間達も笑った。

昨年まで取り組んでいた実証栽培は、別な場所で造られた苗を植えていたが、今年は６年ぶりに、１からの作業となる。4 月 27 日、その第一歩の種まきを行った。

その一歩を祝うような晴天だった。復興メンバーの笑い声が響いた。機械で種をまいたのは、福島県のオリジナルブランド米「天のつぶ」。4.5 ha の水田に植えるため、約 800 枚の苗床に種をまいた。

メンバーの１人がしみじみと言う。「５年食べてないからなぁ、自分で作った米。今年は、食べる楽しみを味わいたいね」」（福島大学「サテライト新聞」16 年 5 月号）

農水省　減反達成要求　農業復興に水差す　農家「被災地考慮を」

「東京電力福島第一原発事故に伴う避難区域で営農再開が進む福島県に対し、農林水産省は 6 月 17 日、平成 28 年産米の生産調整（減反）目標の達成を求めた。今月末までに未達成の場合、交付金減額も視野に入れている。県や JA 福島中央会は原発被災県の事情を考慮していないと懸念を強め、農家からは「実態が分かっていない」と反発する声が上がった。

（稲作）再開直後　「意欲なえる」

数値達成を求める国の姿勢に対し、県内の農業者からは厳しい意見が相次いだ。

南相馬市原町区の特定農業法人「高ライスセンター」社長の佐々木教喜さん（65）は「震災前の状態に戻そうと頑張っているのに」と憤る。

佐々木さんは平成 14 年に地域の中核農家と農業法人を設立した。震災と原発事故で 23 年と 24 年は休耕したが、25 年からコメ栽培を再開した。「浜通りの農業を復活させたい」と願っている。

楢葉町大谷の水田約 60 アールで「天のつぶ」を栽培している猪狩富夫さん（62）は「農家は心待ちにしていたコメ作りを始めたばかり。そうした時に減反の話をされるのは生産意欲がなえる。がっかりだ」と肩を落とした。（「福島民報」6 月 18 日付け）

【待ちに待った５年振りのコメ作り―日本の原風景（楢葉町上繁岡地区）】

【放射性廃棄物の運搬・貯蔵と農業は共存できるのか（楢葉町上繁岡地区）】

５ 年ぶりに田植えをした途端に、「減税しろ！」　５年間、放射能汚染で減反をさせたのはどこのどいつだ。原発被災地の稲作農家は、もうヤケッパチ！